重複障害のある児童生徒の国語、算数・数学における実態把握のための段階表の作成
～国語、算数・数学の視点から考える目標設定と指導・支援の充実に向けて～

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科 高度教職実践専攻
佐々木貴子

1. 研究の背景

肢体不自由特別支援学校における重複障害学級在籍者の割合は他の障害種の特別支援学校と比べると高く、その中でも、肢体不自由と知的障害を併せ有する児童生徒が多い現状がある。学習指導要領では、重複障害者のうち、特に必要がある場合には、各教科等に替えて、自立活動を主として指導を行うことができるとされているが、児童生徒一人一人の障害の状態等を考慮することなしに、重複障害者である児童生徒は、自立活動を主とした教育課程で学ぶことを前提とするといった、最初から既存の教育課程の枠組みに当てはめて考えることは避けなければならないとされている。

特別支援学校においては、障害の重度・重複化、多様化等への対応として「個別の指導計画」を作成することとなっている。この「個別の指導計画」は障害のある児童生徒一人一人の指導目標、指導内容及び指導方法を明確にして、きめ細やかに指導するためのものであり、その作成にあたっては、各教科の習得状況や既習事項を確認するための実態把握が非常に重要である。

A 特別支援学校においては、新学習指導要領の下に、令和３年度から教育課程が編成し直され、今まで自立活動を中心に行っていた重度・重複障害のある児童生徒にも各教科を位置づけた教育課程が編成されるようになった。その中で令和３年５月に「重複障害のある児童生徒の実態把握と目標設定について」のアンケート調査を行い、実態把握に困り感があり、教員同士で共有しやすく、目標設定につながるようなツールがあるとよいといった課題が明らかになった。

2. 研究の目的

本研究は、全ての教科の基礎となる国語、算数・数学の視点から発達段階を知り、行動項目から実態把握を行うことができる段階表を作成し、その段階表を活用して各教科等の目標を設定するとともに、指導や支援の充実につなげていくことを目的とする。

本年度は、段階表の作成とその活用に関するアンケート調査を行い、その結果から次年度に向けて今後の課題を明らかにしていくことを目的とした。

3. 研究の方法

まず、各学部から抽出したメンバーで段階表の作成に向けた検討会を行った。次に、検討会で出された内容を基に改訂した段階表を、抽出した児童生徒と関わる教員に活用を依頼し、活用後にアンケート調査を行った。アンケート調査回答の自由記述については、SCAT 分析を行った。

4. 結果と考察

段階表活用後のアンケート結果では、段階表をつけることで、発達段階の理解からの働きかけや発達段階に合わせた指導の重要性を感じることができた、学習内容の標準化や基準になるのではないかといった意見が挙がり、段階表を活用することが目標設定や指導に生かされるのではないかということが明らかになった。小学部１段階からつけ始めることについては、児童生徒には順序だった成長に困難さがあることを理解した上で柔軟な目標設定をしていく必要があるという考えがある一方で、発達段階を詳細に設定していることから課題が明確化し、目標設定への根拠になったり、主観的になりやすい目標設定の客観性の確保につながったりするのではないかという意見も挙がり、どこからつけ始めるかについては今後も検討を続ける必要があると考えられた。また、教員間での共通理解のための指標になることでチームとして取り組むための体制づくりに生かせるのではないかという意見からは、共通の指標がなかったことへの改善策につながると考えられた。

課題としては、小学部１段階が何歳程度の発達段階を示しているかということへの理解や障害が重度である児童生徒においても教科の指導が原則であることへの認識とその上で教科の視点で考えることの必要性を再確認する、授業で扱う教育内容に対する意識を高めることなどが明らかとなった。

今後は、この段階表を通しての実態把握から目標設定や指導内容へつなげるための方法を検討していく必要がある。

5. 主な参考文献

・徳永　豊、田中信利：障害の重い子どもの発達理解ガイド、慶應義塾大学出版会、2019
・菅野　和彦・川間　健之介・吉川　知夫：肢体不自由教育実践授業力向上シリーズ No.6 新学習指導要領に基づく授業づくり、ジアース教育新社、2021